

〔書評と紹介〕

『青森県史 資料編 考古1』

旧石器・縄文章創期〜中期』

泉 拓良

はじめに

『青森県史資料編考古1 旧石器・縄文章創期〜中期』が平成二九年三月に刊行された。本稿はその書評である。県史、特にその資料編となると、研究書や雑誌論文と違って、文中に論理の構造を見ることが出来ない。したがって本稿では、資料編の流れに沿って内容を紹介し、その都度、批評を加えていくことにする。

青森県史編さん大綱によれば「県史の編さんは、青森県の歴史的発展過程を明らかにし、郷土に対する県民の理解と愛着を深めるとともに、貴重な歴史的資料を県民共有の財産として永く後世に伝え、あわせて進むべき本県の将来を展望し、さらには二一世紀を担う人材の育成を図ることを目的とする」とある。県史資料編はその基本において、県民に向けて青森県の歴史的発展過程を明らかにする歴史資料を提示する点にあることは明らかである。青森県史の考古と関わる『資料編』は、先ずは『別編三内丸山遺跡』の平成一四年三月刊行から始まった。それから一五年かけて、考古編の四冊と別編三内丸山遺跡一冊の合計五冊が完成した。青森県史の通史編全三巻が平成三〇年三月に刊行されて全三六巻が

完成する予定であるという。資料編は自然編を含めて全三三冊であるが、考古関係が五冊という量は、他と比べ考古編の比重が大きい。

このように考古編が他所と比べて丁重に扱われているのは、特別史跡三内丸山遺跡の発掘調査成果が大きく影響していたと推測する。三内丸山遺跡は、県営新野球場の建設に先立つ遺跡調査で本格的な発掘調査が開始されたのが平成四年、発見に次ぐ発見で国の史跡に指定されたのが平成九年、特別史跡には平成一二年に指定された。県史資料編の刊行開始が平成一二年度、県史資料編『別編三内丸山遺跡』の刊行が平成一三年度であるから、県史編集の当初から、強く三内丸山遺跡の成果が意識されたことは間違いないであろう。今回紹介する三内丸山遺跡を含む『資料編考古1』が、扱う時代とは逆で考古編の最後となったのは、『別編三内丸山遺跡』を先行させた為ではないかと思うのは間違いであろうか。前回配本の『資料編考古2 縄文後期・晩期』は平成二四年度刊行であった。『資料編考古4』は平成一五年三月、『資料編考古3』は平成一七年三月に刊行されており、『資料編2』の刊行までは八年の時間があく。その間は、平成一八年一月に青森県と県下の三市一町が文化庁に「青森県の縄文遺跡群」提案書を提出し世界遺産暫定一覧表への記載を求めたことや、平成二二年一月には、秋田県、岩手県、北海道のくわわつた「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」として、ユネスコ世界遺産委員会事務局にて世界遺産暫定一覧表に記載されたことなど、青森県が縄文遺跡の世界遺産登録に積極的な活動した時期に当たる。世界遺産登録への取り組みは現在も続いており、県史資料編で縄文時代の関わる二冊が、この時期に重なっているのは興味深い。

今回刊行された『資料編考古1』は、『資料編考古2』より三年目の刊行である。この三年間は全国のマスコミを派手に賑わすような全国規模での縄文遺跡の発見はなかったが、相変わらず三内丸山遺跡での発掘調査が成果を上げ、国営公園化して徐々に世間の話題から遠のいている佐賀県吉野ヶ里遺跡と比べて、縄文遺跡の話題は切れていない。このようなタイミングで、青森県史資料編考古の完結となる『資料編考古1旧石器時代、縄文時代草創期～中期』が刊行されたのは、時期を得ていると言えよう。

## 一 本の概要

『青森県史資料編考古1』は、A4判、オールカラー、七三二頁である。『資料編考古2』はA4判、オールカラー約六九〇頁、『資料編考古3』はA4判、オールカラー、約八二〇頁、『資料編考古4』はA4判、約七二〇頁であるから、おおよそ、全冊を通じて同じような体裁で作成されたのだろう。オールカラーは贅沢な仕様で使いやすが、本が重くならないような紙質への配慮が欲しかった。高齢者が片手で持てないような重い本はなかなか利用しにくい。

緑のクロス装丁の表紙をめくり、本を開くと、目次の前に「土器編年表」というカラー頁が来る。歴史の資料であるので「年代」は最も重要な基準である。「土器編年表」は考古学を学び、研究するものにとって基本となる年表である。『資料編考古2』では、土器編年表は巻末にモノクロで掲載されていたが、今回は巻頭のカラー頁になって、土器編

年表の大別時期区分が色分けされており、それに基づき各遺跡のタイプが時期区分に応じた色で描かれていてわかりやすい。

しかし、巻頭に持ってきたために別の問題が生じている。『資料編考古1』は、旧石器時代も扱っているので、巻頭の「編年表」ならば、旧石器時代から縄文時代中期までを巻頭の編年表にできなかったのであろうか。旧石器時代の「土器編年表」が本文中にあるのだから可能だったはずである。また、土器編年表には「年代」という欄があるが、降下火山灰の表記に留まっている。降下火山灰の年代が記されているのだから、放射性炭素年代の表記があってもおかしくない。本文中の気候変動の表と対応できる程度の年代は必要であろう。

さて、本文の構成をみると、巻頭の凡例や土器編年表、巻末の用語解説や引用文献一覧を除くと、第1部旧石器時代と、第2部縄文時代草創期～中期とに大きく分けられている。本巻で扱っている旧石器時代（世界的に見れば後期旧石器時代の一部）の長さはおおよそ二万五千年、縄文時代草創期～中期の長さは約一万年である。時間という尺度だけで比べると、第1部とした旧石器時代の時間幅がかなり長い、扱える考古資料はきわめて少なく、第2部は資料が膨大である。記述できる資料の量を考えれば、本巻の文化的・時代的な区分に合理性はあると思う。

## 二 第1部旧石器時代

第1部旧石器時代は、第一章時代概説と第二章遺跡編界内の主な遺跡からなる。さらに第一章は、第一節旧石器時代の自然環境、第二節青森

県の旧石器時代研究史、第三節旧石器時代の石器とその変遷、第四節放射性炭素年代測定法で構成されている。

第一節旧石器時代の自然環境は、地理学的、地質学的な成果と旧石器時代の考古学的研究の成果が合わせ記述されているが、青森県下には火山灰に封じ込まれた埋没林や泥炭層が多くあり、貴重な資料であることは明白であるので、今後、調査が進むことを期待したい。

第二節青森県の旧石器時代研究史、第三節旧石器時代の石器とその変遷には、主な研究史と石器製作技法が簡潔にまとめられており、県下の旧石器時代を概観するのに適している。資料編という性格で限界があるのかもしれないが、日本列島の視点からも青森県の資料が注目される旧石器時代終末期と縄文草創期の石器の関係について、踏み込んだ記述が見られないのが残念である。

第四節放射性炭素年代測定法は、第一部か第二部かいずれに含めるのがよいかと迷ったであろう。第一部と第二部の間に位置する場所に配置したのは、其れが為であろうが、年代と係わるのだから、巻頭の編年表と組み合わせるのも一案だったと思われる。また、放射性炭素年代測定法の一般論しか書いてないが、本巻の年代表記とどう関わるのかが読者の知りたいところである。県史である以上、この点はもう少し丁寧な説明が必要ではないかと思われる。

第二章遺跡編県内の主な遺跡は、青森県内の三〇を超える旧石器時代の遺跡のうち、実体ははっきりしている一二遺跡を紹介している。調査時の写真や出土状況についての記述、遺物の説明等があり、これまでの調査成果を概観するのに適している。縄文時代のような集落や生業・祭

祀等に関わる資料はほとんどないこともあって、記述は石器とその出土状況と簡単である。その中では、八戸市田向冷水遺跡は、完成度の高い報告書に基づき、石器や薄片の出土状況を掲載して、旧石器時代遺跡の状況を詳細に示してくれている。火山灰層との層位的関係から年代も絞り込むことの出来る貴重な例である。

石器の石材については、一項目が設けられても良かったと思う。第二章の各遺跡の説明の中で、黒曜石の産地分析に基づいて、青森県深浦産黒曜石、青森県小泊産黒曜石製の石器が識別されている。また、外ヶ浜町大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡は、周辺で石器石材となる良質な珪質頁岩の産地であることに注目している。旧石器時代、縄文時代には、石器用の石材として黒曜石や珪質頁岩は重要な資源であり、石器石材として広域に広がっていた場合も多い。第二部縄文時代第三章各論第二節遺物第八項運ばれた物には、深浦産黒曜石と小泊産黒曜石の旧石器時代における流通について記されている。それによれば、旧石器時代には深浦産黒曜石製の石器が富山県南砺市や長野県野尻湖周辺から出土している。一方、青森県内の遺跡では、縄文時代に多く見られる北海道産黒曜石が、旧石器時代には出土していない事も指摘されている。第二部と重複しても、第一部旧石器時代のなかで、深浦や小泊の黒曜石産地の現状紹介や県内外での黒曜石流通の記述があった方が、青森県内の旧石器時代の状況を知るためにより意味があると思う。

### 三 第二部縄文時代草創期～中期、第一章時代概説

第一章時代概説の第一節縄文時代の自然環境では、要領よくまとめられた二枚の図がこの節の内容を端的に表している。図1縄文時代の環境変遷模式図は、縄文の時期区分と実年代が表記され、それに対応して縄文時代の大きな植生変遷を示す三内丸山遺跡の植生変遷と、前・中期の遺跡での具体的な植生変遷を表す三内丸山遺跡の植生変遷が示されている。さらに、縄文時代の県内に降下した四枚の十和田テフラと、地球規模での気候変遷図も挿入されており、縄文時代青森県における環境変遷の全体像を知るのに大変役に立つ。図3縄文時代のテフラ降下範囲の図と合わせると、火山灰による遺跡・遺構の編年が理解しやすい。図2縄文海進期の海岸線と青森平野の地形変遷模式図をみると、気候の変遷とは異なり、縄文時代前期までは現在とかなり違う地形であって、中期頃になってようやく現在の地形に近づいてきたことが理解できる。また図には表れていないが、本文に書いてある約九〇〇〇年前以降の日本の形成と気候の変化は、前期以降にみられる日本海側の遺跡増加と関わる問題で、何らかの形で図に示せないであろうか。

第三節「土器の変遷」は一般読者には少し専門的すぎる気がするが、考古学研究者にとっては最新の研究成果が含まれる重要な節である。とくに、早期後葉の土器型式編年が、三沢市早稲田貝塚・野口貝塚などの平成二五年以降の調査成果をふまえて、新たに提示されている点は貴重である。早期末の貝塚形成史や縄文最大海進期を、日本列島規模で考える為に重要な年代基準となる。

第四節「集落」も力作である。青森市三内丸山遺跡のように既に詳細な成果が発表された遺跡もあるが、調査が数次にわたっていたために、

集落の全体像が明らかではない遺跡もある。例えば、富ノ沢(2)遺跡の遺構配置図や、調査が複数の年度にまたがった笹ノ沢(3)遺跡の遺構配置図の復元的な作成は、青森県下の前・中期縄文集落の独自性をより鮮明にしている。富沢遺跡の中期集落は、この節では、青森県独特の列状配置集落として分類しているが、第2章遺跡編中期三七富沢(1)・(2)・(3)遺跡では集落を馬蹄形に復元しており、県としての考えを統一して欲しいと思う。竪穴住居やフラスコ状貯蔵穴や土坑墓に加えて、道路跡や掘立柱建物などの集落構成要素が整う中期は、列状、並列状集落の完成期である。七〇〇棟を超える竪穴住居が発見されている三内丸山遺跡や四〇〇棟以上の竪穴住居が発見されている富沢(2)遺跡が、関東・中部高地の環状集落と異なった独自の集落景観をもっていたことがよくわかる。特に三内丸山遺跡では、縄文ムラの集落諸属性がどのように配置されていたかのイメージを描ける点は、他の縄文集落遺跡では出ていないところである。

第五節「生業」では、人骨の炭素・窒素同位体比分析から当時の食生活を復元している。同じ円筒土器文化圏でも、北海道と青森県で基本的食生活が違う事が明らかである。北海道では海生哺乳類に依存していたが、青森の縄文人は、他の本州縄文人と同じような堅果類と海生魚類からタンパク質を得ていたことがわかると記している。

#### 四 第II部縄文時代草創期～中期、第二章遺跡編

第二章遺跡編は、第一節縄文時代草創期県内の主な遺跡、第二節縄文

時代早期県内の主な遺跡、第三節縄文時代前期県内の主な遺跡、第四節縄文時代中期県内の主な遺跡と、縄文時代の時期区分にしたがって主要な遺跡を紹介している。時期で区分した各節は、さらに津軽地域、南部地域、下北地域に分けている。日本海の形成、日本海気候と関係する津軽地域は、草創期と早期は古十三湖湖岸地域を除くとほとんど遺跡がない。前期、特に円筒土器文化期になり、ようやく青森県全域に遺跡が広がるようである。

この遺跡編で取り上げた主要な遺跡だけでも約二〇〇遺跡もあり、掲載された遺跡の記述を個別に批評することは不可能である。第二章に紹介されている遺跡は、これまでに刊行された報告書や関連文献との関係から、(a) きちんとした報告書が出版されており、遺跡の紹介はその報告書をまとめたもの、(b) 重要な遺跡だが、報告書がないか古くて資料として役に立たないので、改めて資料の再調査をおこなって、まとめたもの、(c) きちんとした報告書があるが、報告書にはない新しい事実の発見があり、その成果が加えられているもの、という三種類に分けられる。以下では、代表的な例を紹介する。

(a) きちんとした報告書が出版されており、遺跡の紹介はその報告書をまとめた例としては、青森市三内丸山遺跡(前・中期)、八戸市松ヶ崎遺跡(中期)、東北町東道ノ上(3)遺跡(前期)がある。三内丸山遺跡は第三節前期、第四節中期の両節に記述があり、さらに第一章第四節集落でも取り上げられている。発掘調査の成果が四〇冊以上の報告書で報告されており、関係図書も多く、県史においては、膨大なデータを歴史資料としてどうまとめるかに苦労が有ったと思われる。縄文ムラの復元

とその変遷は貴重な資料となっている。

(b) 重要な遺跡だが、報告書がないか古くて資料として役に立たないので、改めて資料の再調査をおこなってまとめた例としては、六ヶ所村富ノ沢(1)・(2)・(3)遺跡(中期)、八戸市笹ノ沢(3)遺跡(中期)、七戸町二ツ森貝塚(前期・中期)がある。富沢(1)・(2)・(3)遺跡では、報告書になかった全体の遺構配置図が再整理により新たに作成されている。笹ノ沢(3)遺跡は複数年にまたがった調査の資料を再整理し、列状に並ぶ竪穴住居群の遺構配置図や合成写真が作成されている。

(c) きちんとした報告書があるが、報告書にはない新しい事実の発見があり、その成果が加えられている例としては、小川原湖周辺の野口貝塚と早稲田(1)貝塚である。昭和三〇年代におこなわれた発掘成果に加えて、三沢市が史跡整備に向けて平成二五〜二六年度に新たに新たにおこなった調査成果が加えられている。また、つがる市田小屋野貝塚も平成二四年以降の発掘調査の成果、出土人骨調査も加えて記述されている。

## 五 第Ⅱ部縄文時代草創期〜中期、第三章各論

第一節遺構には、住居、水場、貯蔵穴、墓、捨て場、の項目があり、第二節遺物には、くらしの器、石器、骨角器、植物性遺物、祭り・信仰の道具、装身具、動物遺存体、運ばれた物、という項目がある。

縄文時代後・晩期『資料編考古2』と比べると、項目の違いが若干あり、時代的特徴の違いと、考古学的知識の増加を知ることが出来る。

第一節遺構では、第一項の住居に記述の重点が置かれている。住居の

平面形の変遷や炉の分析は精緻を極めており、遺構の遺存状況の良い青森県に特徴的な成果と言えよう。住居の項に加えて、第三項貯蔵穴、第四項墓は集落を構成する重要な要素を記述した項である。これらと、第一章時代概説の第四節集落とを併せて読むと、集落の全体像をより理解しやすいと思う。第四項墓では、墓の様々な形態の変遷が示されており、青森県に独特の環状配石墓は中期中葉以降、石棺墓、再葬土器棺墓は中期末に作られたことがわかる。縄文前・中期社会を知る上での貴重な資料になるであろう。

第五項の捨て場（遺構）は、『資料編考古2』には無い項目で、新しい遺構の分類なので、本巻で後・晩期を含んでまとめている。この項に含まれる「貝塚」は新しい分類では無いが、青森県での変遷が追えることが出来る項目である。青森県の貝塚は早期中葉に出現し後葉に増加するが、当初は貝類以外の動物遺存体を含まないとある。日本で一番貝塚の多い千葉県での早期の貝塚のあり方とよく似ている。前期には貝塚が増加し、中期には大規模な貝塚が出現するが、千葉県と異なり後期には貝塚の形成が極端に少なくなり、晩期になると再び増加し海獣類の骨が出土するとある。小川原湖周辺の貝塚から出土した貝類の種類の変化が第三章第二節遺物第七項動物遺存体の図3に示されており、早期後葉から前期中葉にかけての縄文海進と、中期後葉での小川原湖周辺の汽水域の拡大という海岸環境の変化を知ることが出来る。

第二節遺物は、全体的に物足りない気がする。例えば、第五項の祭り・信仰の道具では、中期の土偶の出土数約二〇〇〇点は全国最多と書いてあるが、土偶にかんする特別詳細な記述は見られない。第七項動物

遺存体や第八項運ばれた物は、『資料編考古2』には無い新しい項目である。動物遺存体では、県内の貝塚から出土した獣骨の組成や、先述した小川原湖周辺の貝塚出土の貝類組成等が提示され、新しい情報が提供されている。また、第八項の運ばれた物としては、黒曜石や北海道額平川産緑色岩製磨製石斧や糸魚川産ヒスイなどについての紹介があり、縄文時代の流通をうかがわせる資料の存在が判る。しかし、これらをもたらした物流ネットワークなどの研究は未だ進んではいないのであるか。

#### おわりに

『青森県史資料編考古1 旧石器・縄文章創期～中期』は大著である。体裁も、書かれている内容も青森県の縄文遺跡の紹介にふさわしい資料編となっている。編集努力も各所に見られ、読むものにとって使いやすいような配慮も為されている。最も評価できる点は、各遺跡の報告書の寄せ集めではなく、不足する点は再検討をおこない、最新の情報を補って、できるだけ青森県の縄文遺跡の最新情報を提供しようとしている姿勢にあると思う。この本を持って（些か重すぎるのであるが）、青森県の縄文遺跡を訪ねたくなるような本であり、この資料を基に、縄文人達が青森県の地を駆け巡る様を想像してみたい。

勿論、欠点もないわけではない。遺跡編で書かれていることと時代概説の説明が食い違う点が一部あり、また、説明不足の部分・事項も無いとは言えない。

しかし、そのような欠点はごくわずかであり、膨大な生の発掘調査資

料を、県民に理解できるように歴史資料として加工・提供した仕事の成果は、そのような欠点を差し引いてもあまりあるものである。今後の県民ための財産として残る一冊として、十分な役割を果たすと私は高く評価したい。

本稿を書くにあたって、関根達人先生、伊藤由美子氏に大変お世話になった。文末ではあるが記して謝意を表したい。

(A4判、七三一頁、青森県、平成二九年(二〇一七)三月三十一日刊行、本体価格八五〇〇円＋税)

(いずみ・たくら 京大名誉教授)

本会機関誌『弘前大学國史研究』への投稿について  
投稿規定

◎論 文 四百字詰 60枚程度を原則とする(縦書き、以下

同様)

◎研究ノート 四百字詰 20枚から30枚程度

◎研究余録 四百字詰 10枚程度

◎史料紹介 四百字詰 10枚から30枚程度

◎その他(書評・研究動向・歴史随想など) 四百字詰 10枚程度  
◎ワープロでの執筆に際しては、一段につき32字×23行で組んで下さい。字数は右の規定の範囲で計算して、それを超えないようにして下さい。

◎デジタルデータによる投稿も可能です(事前に編集委員会へ御相談下さい)。行数・字数は、ワープロ執筆と同様に組んで下さい。なお、プリントアウトした原稿を添付のこと。

◎横書きを希望する時は、あらかじめ本会へご相談下さい。

◎原稿締切 一月末日と八月末日の年2回

※投稿に際しては、図表を最小限におさえ、完成原稿でお願いします。また、原稿は必ず御手でコピーをとって保存して下さい下さい。投稿は本会会員に限ります。

※掲載については、原稿を受領後、編集委員会で審査し、一ヶ月以内に御通知します。なお、文中に掲載許可を必要とする写真・図版等を含む場合には、掲載決定後、著者の責任において権利者から許可の承諾書を取得して下さい。

※掲載分の論文等については、抜刷50部をさしあげます。

※本誌掲載の論文等を転載する場合は、本会の諒承を得て下さい。